ISSN 0915－9266

ネットワーク 資料保存

第115号 2016年12月

日本図書館協会
資料保存委員会

在欧和古書保存プロジェクトの進展

安江明夫

1．はじめに

筆者は、本誌第109号（2015年２月刊）に「在外和古書の保存など－EAJRS@ルーヴァン報告－」を執筆した。EAJRSは日本資料専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists）のことで、同文中に、EAJRSは2014年秋、和古書保存ワーキンググループ（以下WG）を設置、と報告した。

上記WG設置の主たる目的は、欧州における和古書保存を支援すること及び和古書保存に関わる知識･経験を共有することで、WGメンバーは、現在、和古書所蔵図書館司書を中心に７名。それに筆者がアドバイザーとして加わっている。

WGは設置目的を果たすため、ウェブサイトによる資料保存分野の情報提供並びに和古書保存機関の訪問調査を計画した。WGのウェブサイトはhttp://koshohozon.wixsite.com/eajrsconservation で、そこにWGの趣旨、メンバー、プロジェクト、文献案内・情報提供のコラムを掲載している。WGの詳細については同サイトを参照していただきたい。

WGは計画どおりに活動を進めてきており、それが本年のEAJRS年次大会（ブカレスト）[*1]での「WG2015年／2016年の活動報告」に繋がった。小稿では、同活動報告を中心に、在欧和古書保存プロジェクトの進捗を記したい。

なお、ここで言う和古書は、日本の古書のほか古地図、古写真、版画、手稿等を指す。

2．訪問保存調査プロジェクト

2015年／2016年に、在欧和古書コレクション訪問保存調査を実施した。訪問者は筆者で、計３回の旅行で９図書館[*2]を訪問した[*3]。訪問者は各図書館で和古書担当スタッフと面談し、和古書収蔵書庫、閲覧室等を見て回り、さらに保存部門と連携している図書館の場合はそこを視察し意見聴取を行った。

９館を訪問した筆者の役目は、保存調査あるいは保存アセスメント調査と呼称しているが、大まかに言えば各図書館が所蔵している和古書コレクション及びその管理（保存中心に）の「健康診断」である。調査実施前に準備した「EAJRS和古書保存調査実施要領」（2015年５月作成）ではその点を以下のように補記した。

「本プロジェクトでは和古書コレクションの状態と保存の取組みに関する調査を主眼とする。しかし同時に、人の『健康診断』と同様に、各館の和古書管理担当者と調査訪問者との意思疎通により、訪問者は和古書コレクションの健康に関するアドバイスをし、あるいは担当者が一種の『気づき』を得ることを期待している。

CONTENTS

在欧和古書保存プロジェクトの進展……安江明夫 1
〈参加報告〉資料保存委員会主催・国立公文書館を見学しよう ……田口靖子 4
〈参加報告〉資料保存委員会主催　資料保存セミナー
「写真保存の基礎～どのように残すことがベストなのか？」……宇野淳子 5
〈参加報告〉第102回全国図書館大会第９分科会
「ここからはじまる資料保存－未来に残し，伝えるために－」……田渕敬子 6
日本図書館協会資料保存委員会ホームページのご案内…… 7
資料保存委員会の委員紹介…… 8
資料保存委員会の動き／editor's desk …… 8

安心する、自信を得る、留意点あるいは改善すべき点を理解する、今後どのように取り組めば良いか誰に相談すれば良いかを考えるなど、和古書管理担当者が訪問調査を主体的に受け止め、その結果を活用することが肝要である。その意味で、調査訪問者の位置付けは調査者というよりカウンセラーに近いと考える。」

帰国後、各館ごとに、整理した訪問結果に幾らかの考察とアドバイスを加えて報告書を作成し、各館担当者に送信した。その一方、９館訪問の総括をWGあてに報告した。これらの大部分は上記ウェブサイトに掲載されている。

９館の和古書コレクション所蔵図書館は、和古書蔵書の規模、内容、書庫環境、コレクションの管理体制等において多様である。和古書蔵書が数十点の館から優に千点を超える館まであり、管理体制では日本語能力を有する司書が配されている館とそうでない館があったりする。このように各館は個性的であり、そこが抱える保存課題も多様である。事情はそれぞれに異なるが、一方、特に規模が比較的小さい和古書コレクション所蔵図書館で、「和古書は貴重な資料群なので大事に思っているが、それにかける時間・人手はあまりない。保存上の懸念を抱いている」「自分たちには和古書保存の知識・経験が十分でない」「自分たちの周囲に和古書保存のことを相談できる人はいない」等の声が聞かれた。

各館多様だが、しかし和古書保存の観点からは共有されるべき幾つかの基本項目があると筆者は考えた。それをWGあての総括では「和古書保存の今後の取り組みのために」と題し、以下の項目を記した。（詳細はウェブサイト参照のこと。）

1．資料保存は補修・修復ではない
2．ケアと取り扱いが重要
3．複製も重要な保存策
4．コレクション全体を視ること
5．アーカイブズ資料の扱い
6．利用のための保存
7．点検と評価
8．連携協力が重要

３．ブカレスト大会での報告

さて今回のEAJRS年次大会におけるWG活動報告は次の内容である。（http://eajrs.net/speakers-bucharest-2016#yasue に各発表のスライド掲載）

1）WG活動紹介
（神谷信武／チューリッヒ大学図書館）
2）訪問調査報告（筆者）
3）訪問受入れ図書館からの報告
オックスフォード大学ボドリアン図書館
（英国、タイトラー・イズミ）
オスロ大学図書館
（ノルウェー、マグヌスセン 矢部 直美）
チューリッヒ大学図書館
（スイス、ビシック清子）
セインズベリー日本美術研究所図書館
（英国、平野明）

写真１（セッション風景）

筆者の報告はWGあて総括報告に記した項目を中心とし、訪問調査で見聞した「留意すべき点」を幾つか紹介した。次の写真はその一端である。

写真２（縦置きの和装本）

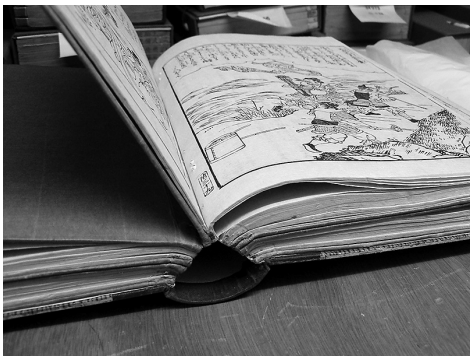


写真３（合冊製本された和装本）

他方、訪問受入れの４図書館からは、各館所蔵和古書コレクションの説明と調査訪問後の取組みが紹介された。

資料保存取組みの具体例は、特別資料室の照明を紫外線防止タイプに替えた、防災計画を資料保存に即して練り直した､保存容器（箱､フォルダーなど）をアーカイバルな素材に替えた、和古書に挿入されたメモ用紙（旧蔵者によるもの、図書館受入れ時のもの。原資料に悪影響を及ぼすおそれあり。）を記録の上、別置した、貴重資料紹介をより積極的に実施しHPに公開している、等である。

発表後の質疑では､「和紙と洋紙の保存性の違い」「過去に洋装製本した和装本の扱い」「写真アルバムの取扱い」「在ルーマニア浮世絵コレクションへの取組み」について質問・発言があった。

セッションでの実践的報告、具体的事例紹介は大会参加者の参考になったようで、WGが実施したセッション後のアンケートに対し「実践的なアドバイスが有益だった」「セッションの発表は大変、有益。特に、最小限の手当てや補修・コンサベーションではなくプリザベーションの用語で考える点など」「私は司書ではないが本セッションは最も興味深いものの１つだった」「他の機関の様子がわかって良いセッションだった」「素晴らしい取組みと思う。保存だけでなく活用についても視野に入れていて、継続されれば欧州における日本資料発掘の有効な手段になる（日本から)」「ヨーロッパ各国の大学の事情がわかり感謝する｡また紫外線防止灯、地図を入れている棚などは私の大学でも放置状態なので注意を喚起したい（米国から)」等のコメントが寄せられた。

４．今後について

先に記したようにWGではセッション後、１）セッション、２）訪問調査プロジェクト、３）WGの活動全般、の３項目について特に欧州からの参加者対象にアンケート調査を実施した。集計結果の分析は途中だが、寄せられた回答からは以下が読み取れる。

その１つは、保存調査ニーズが各所にあり、訪問調査プロジェクトを継続していく必要があること。「自分の図書館でも訪問調査を希望する」「東欧諸国でも訪問調査をして欲しい」「浮世絵コレクションについて支援してもらえないか」「私どもは貴重な図書とともに写本を所蔵している。それらの保存のための訪問調査を受け入れたい」等の回答があった。

また大会中に耳にした話では、日本語を解するスタッフがおらず蔵書内容が把握できていない館、日本語･中国語資料の利用ニーズが低く、それらがダンボール箱収納されている館、図書だけでなく様々なモノ資料があり、その保存が急務となっている所、があるとのことである。これらについても、今後、何らかの取組みが必要とされる。

一方、WGの活動に対しては「EAJRSの存在感を高めるものになる」「WGの活動は素晴らしいし有益」「サイト上の調査報告は内容が豊富。これをまとめ、英訳を付し、刊行してはどうか」「和装本・巻子等の取扱いをテーマにしたワークショップ開催を希望する」など、概ね、高い評価と活動継続への期待が寄せられている。

WGでは、アンケート回答を整理し訪問調査プロジェクトの継続を検討する、次回のEAJRS大会（オスロ）でも資料保存セッションを予定する、ウェブサイトの内容を充実させる、などを打ち合わせている。そうしたなか、今後、欧州の和古書等保存機関と日本の資料保存関係者の接点も増えて来ると予期している。EAJRS和古書保存WGの活動を、本誌読者の皆様も関心をもって見守っていただきたい。

＊１　今次大会の参加者は20か国から80数名。
＊２　訪問先はベルリン国立図書館東アジア部、チュー

リッヒ大学日本学部門図書館、オスロ大学人文社会学図書館、ルーヴァン･カトリック大学東アジア図書館、ルーヴァン・ラヌーヴ大学貴重書図書館、スロヴェニア学術・藝術アカデミー図書室、ロンドン大学SOAS図書館、セインズベリー日本藝術研究所図書館、オクスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館の９館。

＊３　訪問保存調査は東芝国際交流財団の助成を受けた。

（やすえ・あきお　資料保存コンサルタント）

＜参加報告＞

資料保存委員会主催・国立公文書館を見学しよう

田口靖子

2016年６月13日国立公文書館を訪問した（20名参加）。2015年12月の資料保存セミナー「国立公文書館の資料保存、これから」に続き、保存・修復の現場を見学するということで、たいへん楽しみにしていた。

この研修見学会は、まず国立公文書館の沿革や理念、資料の利用方法等について解説したDVDを見ることから始まった。その後、２階の閲覧室に移動し、いよいよ見学の開始である。

「当館職員は、資料の取扱に際し、手袋を使用しておりません」と総務課職員の南雲さん。手袋をすると指先の感覚が鈍くなり、破損につながる恐れがあるそうだ。国立公文書館は、国の機関及び独立行政法人等から移管を受けた歴史資料として重要な公文書等を保存、利用するための機関である。デジタル化を進めているが、手続きを経れば、原則、原本の閲覧が可能である。公開資料である「日清戦争開戦勅諭の閣議書（明治27年８月１日）」を見せてくださった。「これはどなたのサインでしょう？」。草かんむりに「又」のような文字、時の総理大臣伊藤「博文」の花押で、もちろん直筆である。100年以上前の遠い歴史が、急に身近に感じられてくる。私たちがこれから見学するのは、こうした貴重な「歴史的公文書」を永遠に受け継ぐための仕事場なのだ。

続いて向かいの第１修復室に入る。ここでは和紙の虫損や水損、酸性劣化について、手作業による「繕い、裏打ち、破れの補強」の修復が行われる。「永久保存、長期保存に耐えうるよう、一点ずつ状態を確かめながら行っています」と話す業務課修復係長の阿久津さん。９名の担当者の手さばきに、思わず目を奪われてしまう。虫損が進んでいる資料は、リーフキャスティングという機械による修復を行うとのことで、操作の実演も見せていただいた。

次に地下の書庫を見学する。書庫の中は土足厳禁である。『公文類聚』『公文雑纂』などの資料は平置きで書架に並んでいる。公文書の紙は柔らかく、立てるとしなってしまうので、資料の形状等に合った配架方法を決めるという。簿冊の間に挟んだ「しおり」には、誰がいつ、何のために出納したかが記され、職員間での連絡票の役割を果たしている。

最後に再び２階に上がり、保存整理室を訪れる。ここは、本館所蔵資料の保存業務を行っており、書庫、展示施設の環境管理や目録情報の管理のほか、デジタル化計画の立案・推進に関わる業務をこなし、閲覧に制限がある資料について、利用用代替物を作成して利用の便宜も図っている、まさに資料管理の中枢ともいえる部署なのである。

時計をみると、たっぷり２時間が経過していた。技術や設備だけでなく、国立公文書館の資料管理全体を理解する上で、大変有意義な研修見学会であった。資料の保全と管理を土台に、次世代へ知識を継承することは、図書館にも共通の課題である。普段、表に見えるものではないが、そのための人材育成や蔵書管理システムを整備することは、図書館に対する社会的理解と信頼を深め、利用へと繋がる大切な礎石ではないだろうか。

国立公文書館では、１階展示ホールにて、『終戦の詔書』の原本を期間限定で展示する（2016年８月８日（月）～15日（月））。資料は「国立公文書館デジタルアーカイブ」で公開されているが、この機会に原本と比較するのも興味深い。画像にはない情報が、そこにはあるのではないか。資料を保存と利用の両面から考える上でも、今一度国立公文書館を訪れてみたい。

（たぐち　やすこ／東京都立中央図書館）

＊参考　国立公文書館HP：http://www.archives.go.jp/

＜参加報告＞
資料保存委員会主催　資料保存セミナー
「写真保存の基礎～どのように残すことがベストなのか？」

宇野淳子

2016年９月９日（金）午後７時から、日本図書館協会研修室において標記セミナーが行われた（参加者35名）。

筆者は以前、大正期の写真などのデジタル化作業に従事していた。そのため、写真の保存には関心を持っており、保存の基礎を体系的に学びたいと思い参加した。

講師の山崎信氏は、株式会社フォトクラシック代表取締役としてオリジナルプリントや保存用品の販売、写真の保存や展示のアドバイザーをされるとともに、日本大学芸術学部の非常勤講師も務められている。本セミナーでは、保存に適した収蔵環境についてなどは配布資料に譲り、写真方式の変遷の概略と作品を通してみる写真史の２点を軸にお話しくださった。

写真方式の変遷の概略では、16世紀から17世紀のカメラ・オブスクーラ（写真鏡）から、ダゲレオタイプ、カロタイプ、湿板写真、乾板写真、ロールフィルムへと写真方式が変遷してゆくことをお話しくださった後、ダゲレオタイプとアンブロタイプ、ティンタイプを回覧してくださった。通常は展示ケース越しに見ていたダゲレオタイプを手に持ち、光が当たる角度によって画像の見え方が変わることを実見できたこと、何よりも19世紀に撮影された写真に直接触れられたことは貴重な体験だった。

また、作品を通してみる写真史は、フォトクラシックが展示プランニングに携わった企画展「『フジフイルム・フォトコレクション』展　日本の写真史を飾った写真家の『私の１枚』」(2014年にFUJIFILM SQUAREにて開催）の会場の様子を例としてお話しくださった。同展はフェリーチェ・ベアトから現代の写真家に至る101人の写真家の作品を展示したとのこと。その中の一人､鹿島清兵衛の手彩色の作品を実見した。とても鮮明な色で、退色はあまりないのではないかとの印象を持った。これらの作品は、ピュアマット＊を使用したブックマット（シンクマット）形式で保存することで、作品（プリント）に圧をかけずに、また通気を良くし、湿度がたまらないようにしているとのことだった。

質疑では実務的な保存方法を学べた。反りが出た写真を平坦化するには台紙を重ねた中に挿み、印画面にはピュアガード＊を載せ、箱に入れて半年おくと改善する。写真ネガはピュアガード70を蛇腹に折ったものにしまい、中性紙封筒に入れておくとよい。Ｌ判写真を整理する際は、印画面の接触を避けるために同じ方向で重ね、縦に並べて箱に収めるとよい等を学ぶことができた。印画面の接触はスクラップブック等に貼られた写真では起きており、ピュアガードを間紙として挟むことが、まずできる保存対策となるのだろうか、とお話を伺いながら考えていた。

本セミナーでは写真資料の中でも一葉となっているプリントを例として保存の話をしていただいた。一方、図書館や文書館ではアルバムに貼り付けた写真も収蔵している。たとえ台紙部分の酸性劣化が進んでいたとしても原形保存の原則を考えれば台紙と写真を分離するのは望ましくない。各資料保存機関がそれらにどう対応しているのかについても機会があれば学びたい。

（うの　じゅんこ・
立教大学共生社会研究センター　研究員）

＊：ピュアマット／ピュアガード
アルカリに敏感な資料や作品のノンバッファーの台紙と保護用紙（株式会社TTトレーディングの商標名）。

＜参加報告＞
第102回全国図書館大会第９分科会
「ここからはじまる資料保存
ー未来に残し，伝えるためにー」

田渕　敬子

2016年10月16日、全国図書館大会第９分科会が青山学院大学において行われた。

今回は、都立図書館の眞野氏の基調報告を始め、埼玉県立図書館と一橋大学社会科学古典資料センターでの取り組みを直にお伺いできるとても魅力的な構成になっていた。

会場は約94名の参加者で一杯になり熱気あふれる中、眞野氏の基調報告から始まった。

「なぜ残し、どう残すのか－資料保存・修理の基本的な考え方と手法－」と題した報告では、図書館における資料保存とは何かという基本的なことと基礎的な知識を図書館員として長年培ってこられた経験を踏まえて、修理経験がなくとも理解できるよう分かりやすくお話いただいた。

資料保存とは何か。それについては壊れた資料に出会うと何が何でも治さないといけないという事を機械的に繰り返してきた中では、あまり深くは考えてこなかった。眞野氏は大切な考え方として「利用のための修理保存」を示された。また図書館機能も違えば所蔵している資料も違いその価値も状態も千差万別でありすべての資料に当てはまるマニュアルは存在しないとし、共通して大事なこととして「出来るだけ修理をしない」「利用にたえうる最小限の修理」の考えを示された。

次に、「埼玉県立図書館の資料保存－ゼロからの取組」を神原陽子氏からご報告いただいた。

ゼロからの取組と題した通り、当初は施設の老朽化、空調設備もなく、保存を担当する部署もなかったという。これは多くの図書館に当てはまる状況であり共感された方も多かったであろう。「図書館資料保存員会」が設置されて現在に至るまでの保存への関心の低さ、カビの発生、マニュアルの作成、資料保存研修の開催、市民向けの修理講座など様々な問題点やそれを克服する対策、取組等は参考になる事例ばかりであった。

最後の報告として「一橋大学における西洋古典資料保存の取組－ただ古いだけではない－」を床井啓太郎氏からご報告いただいた。中でも興味深かったのは、メンガー文庫保存関連事業がこのセンターの保存活動の原点であり、その事業を成し遂げるため保存の必要性を訴え予算等も含め大学とのセッションを行った人物がいたからこそ成りえた事業であったという事と、すべて貴重書にも関わらず利用者に供する図書館であるという事であった。

床井啓太郎氏

会の最後には和紙に触れるワークショップも行われた。

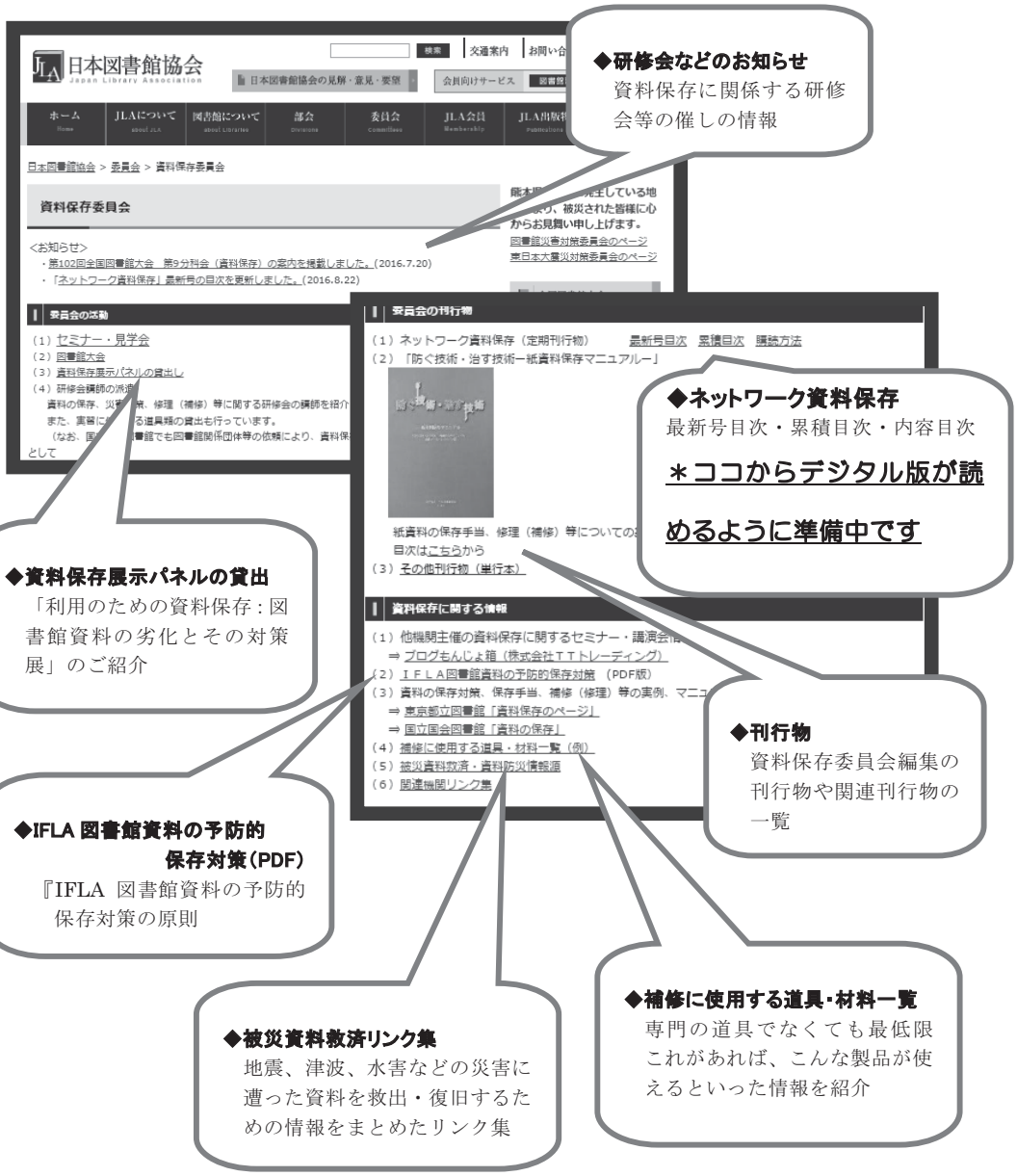
今回、一番印象的だったのは、基調報告の中で、眞野氏が津波被害の修復作業を通して私達に伝えてくれた言葉だった。「その地域の歴史、土地の記憶をも残していくということ、集めなければ残せない、残そうと思わないと残せない。その思いがあれば知識や技術はついてくる。」

最後に、ご多忙の中今回の分科会を開催していただいた皆様には改めて感謝いたします。

（たぶち　けいこ・武蔵野市立中央図書館）

日本図書館協会資料保存委員会
ホームページのご案内

http://www.jla.or.jp/committees/hozon/tabid/96/Default.aspx



◆研修会などのお知らせ
資料保存に関係する研修会等の催しの情報

◆ネットワーク資料保存
最新号目次・累積目次・内容目次
＊ココからデジタル版が読めるように準備中です

◆資料保存展示パネルの貸出
「利用のための資料保存：図書館資料の劣化とその対策展」のご紹介

◆IFLA 図書館資料の予防的保存対策（PDF）
『IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則

◆刊行物
資料保存委員会編集の刊行物や関連刊行物の一覧

◆被災資料救済リンク集
地震、津波、水害などの災害に遭った資料を救出・復旧するための情報をまとめたリンク集

◆補修に使用する道具・材料一覧
専門の道具でなくても最低限これがあれば、こんな製品が使えるといった情報を紹介

資料保存委員会の委員紹介

今期の委員に氏名・所属・委員会での役割・ひとことをお願いしました！

眞野節雄（しんの・せつお）
東京都立中央図書館（資料保全専門員）
委員長
　他の委員のサポートを少しでもできれば…という「名ばかり」です。資料保存や修理についての研修会講師依頼があれば全国各地に出向いています。先輩たちのご尽力にもかかわらず、「利用のための資料保存」はまだまだ浸透してません。継続は力、と信じて。新委員大募集中。経験・知識不問。

新井浩文（あらい・ひろぶみ）
埼玉県立文書館
図書館年鑑担当
　最近委員会に出られていないので、委員の皆様にはご迷惑をおかけしてます。文書館の学芸員という立場におりますので、LMA連携に少しでも貢献できるよう頑張ります。

神原陽子（かんばら・ようこ）
埼玉県立久喜図書館　子ども読書推進担当
全国図書館大会担当
　資料保存について最新の情報を得るだけでなく、共通の悩みを抱える人たちの交流の場になればと思いつつ、自らの研鑽もかねて、運営しています。

児玉優子（こだま・ゆうこ）
（公財）放送番組センター
ホームページ担当
　主な関心は、映画・テレビ番組・録音資料などの視聴覚アーカイブです。記録媒体やフォーマットの急速な移り変わりは、資料保存の上では頭の痛い問題です。

佐竹かおる（さたけ・かおる）
埼玉県立熊谷図書館
研修会の補助等
　資料保存は図書館の根幹を支える重要な業務です。今年度はできる範囲でお手伝いするようがんばります。

高橋幸伸（たかはし・ゆきのぶ）
国立国会図書館
ホームページ、セミナー担当
　資料保存課に所属しておりますが、事務職のため技術担当のような専門的な技術や知識はあまり持ち合わせておりません。この委員会で少しでも知識等を得られればと思っています。

田﨑淳子（たさき・じゅんこ）
東京大学駒場図書館
セミナー担当
　職場の防災について考える機会がこのところ多いです。過去の事例から学べること活かせることはたくさんありますが、それでも対策が十分にできているとはまだとても言えません。みなさんの職場ではいかがですか？

宮原みゆき（みやはら・みゆき）
浦安市立中央図書館
「ネットワーク資料保存」担当
　よもや、自分がデジタル版移行の役目を負うとは思ってませんでしたが、頑張ります（汗）！

横山道子（よこやま・みちこ）
神奈川県立藤沢工科高等学校図書館
図書館大会の運営補助等担当
　ここ数年、例会の出席率を下げる係になっています。が、委員会の雰囲気が好きなので、メールに頼りながら、できる範囲でお手伝いするよう頑張ります。

資料保存委員会の動き

資料保存見学会
「国立公文書館を見学しよう！」
日時　016年６月13日（月）
見学先　：国立公文書館（本館）
参加者数：20名

2016年６月定例会
日時：2016年６月15日（水）

場所：日本図書館協会会議室
出席：９名（オブザーバー含む）
内容：
報告事項（見学会:国立公文書館／「ネットワーク資料保存」:114号内容・予定／災害対策委員会より熊本地震続報、対応予定／大会）
協議事項（セミナー：写真保存の講師決定、広報確認、12月修理研修予定、その他テーマ候補募集／大会：案内、「図書館雑誌」用分科会招待、ハイライト原稿の担当・締切確認／見学会：候補協議）

７月定例会
日時：2016年７月14日（木）
場所：日本図書館協会会議室
出席：８名（オブザーバー含む）
内容：
報告事項（セミナー:写真保存－「図書館雑誌」広報掲載／「ネットワーク資料保存」:114号入稿の納品予定、114号進捗状況／HP：大会案内アップ／JHK共済シンポジウムスタッフ要請、参加者確認／中堅職員ステップアップ講座２「トピック」講師：眞野委員長）
協議事項（大会：実行委員会出席、運営委員選出、大会への招待校正、参加者対応協議）
その他（情報提供：国会図書館、７月末、熊本県立図書館に補修指導）

８月定例会
日時：2016年８月17日（水）
場所：日本図書館協会会議室
出席：７名（オブザーバー含む）
内容：
報告事項（「ネットワーク資料保存」:紙ベース発行の予定確認、114号進捗状況／検討中の投稿あり）
協議事項（大会:委員の参加者と役割分担確認、会場視察予定、実行委員会報告、ワークショップの準備協議／JHK共催シンポジウム：委員の参加者と役割確認／セミナー：写真保存－日程、委員の参加者と役割分担、修理研修－日程、広報、会場確認／見学会：候補と交渉予定）
その他（国会図書館の熊本県立図書館での補修指導報告／諫早市立森山図書館の被災状況／国会図書館資料保存セミナー予定、ICAソウル大会予定）

資料保存セミナー「写真保存の基礎
～どのように残すことがベストなのか？」
日時：2016年９月９日（金）
場所：日本図書館協会研修室
講師：山崎信氏
（株式会社フォトクラシック代表取締役）
参加：36名

９月定例会
日時：2016年９月15日（木）
場所：日本図書館協会会議室
出席：８名（オブザーバー含む）
内容：
報告事項（「ネットワーク資料保存」:115号予定内容／大会：／写真セミナー報告）
協議事項（大会：会場下見報告、当日作業予定確認／セミナー：修理研修－日程変更、内容、補助員の確認）

第10回資料保存シンポジウム
「未来に遺す情報保存－収集・保存・利活用－」
（JHK情報保存研究会共催）
日時：2016年10月３日（月）
場所：一橋大学一橋講堂中会議場
参加：170名

第102回全国図書館大会第９分科会
「ここからはじまる資料保存
－未来に残し，伝えるために－」
日時：2016年10月25日（日）
場所：青山学院大学
参加：94名

11月定例会
日時：2016年11月16日（水）
場所：日本図書館協会会議室
出席：６名
内容：

報告事項（セミナー:修理研修－日程、補助員、準備品確認／「ネットワーク資料保存」115号内容、刊行予定）

協議事項（見学会：一橋大学社会科学古典資料センター －日程決定、広報確認／大会：102回－反省、記録等の確認、HP掲載準備、103回－テーマ募集／「ネットワーク資料保存」デジタル版：開始時期と記事候補、バックナンバー掲載時期提案／事業計画）

12月定例会

日時：2016年12月14日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：５名（オブザーバー含む）

内容：

報告事項（修理セミナー：参加者、補助員、スケジュール、会場設営確認、アンケートの実施（結果をHP等に反映する）／一橋大学社会科学古典資料センター見学会：委員の参加確認、広報原稿確認／「ネットワーク資料保存」:115号進捗状況、116号以降のレイアウト変更／大会記録：校正、HP掲載の予定について）

協議事項（第103回全国大会分科会テーマ案：／セミナー・見学会候補）

editor's desk

紙ベース最終号です。116号からは、日本図書館協会資料保存委員会のホームページで読めるように準備中です（７頁をご参照ください)。

「ネットワーク資料保存」を前任者から引き継いで７年、21号に関わりました。その前に編集のお手伝いを１年ほどいたしましたので、８年ほどやったことになります。ほんの10ページ余りのニューズレターをつくるだけなのですが、企画には毎回苦労が付きまといました。はじめは、前任者たちが築き上げた内容レベルを維持するどころか、埋めるのに精いっぱいというのが正直なところでした。編集作業自体は他の団体での経験はありましたが、資料保存については勉強するために委員になったくらいなので、張れるアンテナにも限りがあり、個人的な人脈もありませんでした。いろいろな方にお世話になりましたが、なかにはインターネット検索でヒットした内容を見て、全く知らない方に紹介なしでメール連絡をし、趣意をくんでいただいたということもありました。

他にも、寄稿くださった方、こちらから無理を承知でお願いし、取材に応じていただいた方、快く参加報告等を書いてくださった方など、感謝してもしきれません。あらためて御礼申し上げます。

また、新旧含めて、委員会のメンバーには企画だけでなく、執筆依頼の橋渡しのほか原稿執筆そのものをお願いする機会も少なくなかったと思います。そして、埋めるのに精いっぱいな内容ではいけないと、手を差し伸べてくれた旧委員のＭさん。101号から編集に携わってくださいました。的確なアドバイスと実行力のおかげで、時には特集も組むことができました。様々な方々に支えられてここまで来ましたが、どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

1985年から「資料保存委員会ニューズレター」としてはじまり、2012年には100号を超えました。これまで刊行してきた内容は、総目次という形で、現在もホームページでたどることができますし、一部欠号もありますが、日本図書館協会に注文すれば入手できます。また、116号からはお知らせのとおりデジタル版となりますが、バックナンバー（掲載許諾をいただいた記事のみ）の掲載も100～115号分を何回かに分けて公開の予定です。これからもどうぞよろしくお願いいたします。（み）

ネットワーク 資料保存　第115号　2016年12月

編集・発行：日本図書館協会　資料保存委員会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
☎03-3523-0816　FAX 03-3523-0841
印刷：船舶印刷株式会社
用紙：クリームキンマリ 4/6T　72.5kg
年間購読料：2000円（年４回刊行、税込み）
定価：本体価格476円（税別）